



いつもお世話になっている配属先の女性開発部のスタッフ。彼女たちのサイペには救われています。

## サイペ、大丈夫さ

青年海外協力隊 2018 年度 1 次隊 派遣国：トンガ王国 伊藤有未（三郷市）

「サイペ」日本語に訳すと「大丈夫」の意。トンガの人たちと活動や生活を共にする中で、彼らも私も 1 日に 10 回以上使うこの言葉。今回は、この言葉が持つ良し悪しについて、分析したいと思います。

良い面は、「なんとかなるさ」と寛容かつ前向きに物事を捉えられること。

多少事が悪い方向に進んでも、間違えても、上手くいかなくても、サイペとい

う一言に、私は今まで何度も救われてきました。日本人的な遠慮で「え、これでいいの」と思うことも、この一言が一掃。

一方、サイペが抱える問題点としては、単純に良い面の逆。何事も大丈夫で済まされてしまうことが挙げられます。

言語面では、“How are you?” “I’m



スティック部分は木の枝。再び使えるようになれば、どんな方法であれ、サイペ。

fine.”にあたるおきまりの挨拶に“Fefe hake?” “sai pe (サイペ)”が存在します。トンガ語にも、fine, good, great と調子の良い時でも複数の表現があるようですが、皆さん決まって「サイペ」。日常生活においては、計画が遅れても、落ち度があってもサイペで解決。「いやいや、サイペじゃないから」ともう少し事の重要性や責任感を抱いてほしいという時に、この魔法の一言があるだけで大丈夫でないことも、大丈夫として見なされます。だからこそ計画通りに進まなかったり、事の重大さを捉えることができなくなるんだと考えれば、つじつまが合います。また、先を見据えることが苦手なトンガの人たち。その場しのぎで「サイペ」と言いつつ、後になって陰口を叩く場面も少なくありません。会議等で他者が発言中にも、口パク会話が多く見受けられたり、言葉と文化、社会性や国民性の全てが、密接な関係にあると言われるのも理解できます。

「サイペ」。この言葉 1 つで簡単に解決できることもありますが、もっと深く考えてほしい時には実行力を欠けさせる起因です。観光目的の短期間の滞在では分析が難しいであろう社会言語学。実際に協力隊として住んで活動して知る言語とその文化の結び付きを追究するのも魅力的で面白いと気づきました。



赴任直後、噂には聞いていたパンとアイスクリーム。美味しければ、これでサイペなのか。あとは、パンに炭酸飲料をかけて食べるのも見かける光景。